

川淳選集

第十五卷

石川淳選集 第15巻 (全17巻)

1981年1月7日 第1刷発行 ©

定価 1300 円

著 者 いし かわ じゅん
石 川 淳

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

諸國畸人傳

小林如泥

算所の熊九郎

駿府の安鶴 附 あんぱい松

都と一坊扇歌

細谷風翁

井月

鈴木牧之

阿波のデコ忠

五

六

二四

三六

五四

六七

八三

九九

一二三

武田石翁

二九

阪口五峰

一五

文章の形式と内容

一七

短篇小説の構成

一四

祈禱と祝詞と散文

二三

戰中遺文

二六

歌仙

二六

だから、いはないことぢやない
すだれ越し

二六
二五

一虚一盈

二九

寄酒祝

三三

政治についての架空演舌

三四

評論隨筆

五

諸國畸人傳

小林如泥

一

寛政九年（一七九七）二月、出雲國松江大工町に住む指物大工小林安左衛門は藩主松平氏七代治郷ハルサトから剃髪を命ぜられ、如泥の號をさづけられた。ときに如泥四十五歳、治郷四十七歳。治郷はすなはち不昧である。

出雲の藩祖松平直政は結城秀康を父とし、徳川家康を祖父とする。直政もと信濃國松本に封ぜられてゐたが、寛永十五年二月松江に移された。如泥の祖もまた大工として藩祖にしたがつて松本から松江に轉じたものである。これよりさき、慶長十六年、出雲を領して

富田トダの城にあつた堀尾吉晴が松江の城をきづいてこれに移つたとき、大工方は築城の功に依つて、松江大橋にちかく、水をへだてて城を望みうるところに、居住の地をあたへられた。すなはち大工町である。のちの藩主松平氏もこのおなじ地に大工方を住まはしめた。

小林氏代代住みならはした地はここであり、如泥幼名甚八は寶曆三年この大工町の家にうまれた。家は仕事場を兼ねて、間口四間、奥行十八間、表はただちに道路に面し、裏より數歩にして西の方は宍道湖のほとり、嫁ヶ島をついまぢかに見る。これが松江十八萬六千石の城下に於て藩主の眷顧をかうむつた大工の家であつた。今日、大工町の稱はほろびて灘町と呼ばれてゐるが、如泥の舊居はなほ存して、げんにその末裔がそこに住んでゐる。

如泥がもつぱらつとめた業は指物であつた。もともと彫師ではないが、ときには木彫をもこころみた。指

物といつても、尋常の道具のたぐひではない。おほむね治郷の意を體してつくつてゐるので、謂ふところの不昧ごのみである。逆に、如泥の作風が治郷のこのみに傾向をあたへたといふこともありうるだらう。この關係はもちつもたれつのやうである。如泥の作品について、つとに大正二年九月十月の交、故高村光雲翁が建築工藝叢誌第二十一冊および第二十二冊にその見るところを記してゐる。翁は如泥の手練を入神の技とみとめて、依怙地なことをしたものだといふ。これは窮屈といふ意ではない。依怙地に於て自由であつたといふことなのだらう。この評語は如泥の生活の仕方とも、仕事の仕方とも、雙方に係つてゐるものと見られる。自由な工匠。如泥の作品が今日に生きのこりえた祕密はつい目に見えるところにあつた。

松江市のひとは日常よく茶をたしなむ。これは今日のことである。どこの家をたづねても、座敷にあがる

と、とたんに薄茶が出る。他の土地の煎茶番茶のたぐひと同様で、だまつてゐると、つい代りが出る。毎日十杯あまりのむひともめづらしくないだらう。これをのむにはかならずしも禮法に係らず、あぐらでがぶがぶといふ略式もやかましくはとがめられない。そして、およそ茶のあるところまた庭あり、いかに狭くとも狭いなりに、石をあしらひ水をあしらひ、きちんと庭ができてゐる。たとへば市場の商店といふざつな表がまへでも、一あし奥にはひると、たちまち右のおもむきを呈する。今だに不昧の流にしたがつて、横町の溝にもさざなみは絶えないらしい。可憐である。この茶と庭との仕掛に於て、ひとは不昧文化の今日的内容を諒解させられるだらう。つまり、げんなりするほど薄茶をのまされるといふことになる。この薄茶の席で、風雅なはなしのたねはといへば、焼物の權兵衛、塗物の勝軍木庵、わけても道具は如泥にかぎる。その如泥の

細工の、茶箱なり香合なり煙草盆なりを、そこにもち出されて見ると、こいつ、今日の茶よりも庭よりも新鮮なことに、ひとは氣がつくだらう。なにが不昧ごのみか。この細工は不昧流から自由である。なるほど、如泥は依怙地であつた。

餘事ながら、松江の町に來るひとが古刊本寫本のたぐひをあさるつもりであつたとすれば、ちよつとあてがちがふ。この町はいくさの火に焼けてゐないのに、個人の藏書家は別として、古本屋といふものは絶無といつてよい。むかしは三軒あつたさうだが、今では一軒あるかなしといふ。あつさりしたものである。ここで松江藩の學問について語るにはおよばないが、不昧流はどうも後世に古本はのこさなかつたやうである。その代りに、巷の茶と庭との仕掛の中から、如泥をとり出してみせるといふ手妻をのこした。たしかに、わけのわからぬ虫くひ本なんぞよりも、このはうがいた

だける。不昧さんも粹なひとであつたといへる。

如泥の如といふ字はジヨとよむかニヨとよむか、はじめ判然としなかつたが、松江に來てそれがジヨであることをたしかめた。そして、泥の字のはうは、松江のひとはデイとはにごろない。テイと清んで發音する。ジヨテイさんである。ときに、魚町の鹽津正壽翁のはなしに依ると、如泥に似て非なるもの、すなはち窮屈といふ意味での依怙地な職人の、いやに如泥きどりであるやつのことを、ひとは「如泥さん」とか「如泥大工」とかいつてバカにするといふ。(念を押すやうだが、ここはぜひジヨテイと發音して下さい。)これを見れば、ほんものの如泥がいに松江のひとに愛され大切にされてゐるかといふことがわかるだらう。ジヨテイさんは今でも横町に生きてゐる。

ところで、この如泥の生活をつたへようとする、なにぶんにも當人が依怙地なうへに古本屋の無い町と

きてゐるので、文獻の徴すべきものにくるしむ。それに、如泥の生活はこれに無用の筆をつけることを拒絶してゐるやうなふぜいにも見える。ただ今日なほさかんにおこなはれてゐるのは、ジョテイさんについての町のうはさである。ほとんど口碑に似てゐる。如泥はもはや傳説の名工として不幸にも死ぬといふたのしみを知らない。わたしは如泥の作品のはうはしばらくあとまはしにして、右の町のうはさのいろいろを手あたりに、すなはち無撰擇にここに書きつらねておくことにする。すでに、うはさである。眉唾ものもまじつてゐるらしい。わたしがわざわざ小説ふうの細工をほどこして餘計なウソをついてみせるといふ手数をかけないでも、ウソはおのづからその中にあるだらう。いや、ウソの中にも、如泥は生きてゐるかも知れない。うはさの眞實については、これを聞くひと讀むひとが薄茶でものみながらゆつくり鑑定すればよい。

二

治郷が如泥にこの號をさづけたのは、笑殺山翁醉如泥といふ唐人の詩句に由來するといふ。由來はともかくとして、如泥がときに泥のごとくに酔つたといふことはおそらく事實である。酔へばまれには士人にむかつて無禮をはたらいたといふはなしもありえた。また如泥が殿中に酔ひつぶれたをりに、治郷が小姓をしてその髪を剃らしめたといふはなしにもなつて來るだらう。何にしても、治郷の庇護はつひに如泥のあたまにおよんで、これを坊主のかたち仕立てることに依つて、その身分に係らず側近に侍することを許したものとおもはれる。如泥はさきに天明三年三十一歳、當時親がかりながらはじめて奥納戸の用命を受けて以來、寛政二年三十八歳父の死に逢つてその跡をつぎ、給銀三百七十五匁三人扶持、大工竝となり、寛政四年四十

歳譜代格大工にすすんだが、前後にかずかずの作品を示して、褒美にあづかることいくたび、技もまたやうやく圓熟の期に入つたのか、剃髪之年に至つては、この大工の親方の坊主あたまはすでに風流人の藩主のふところに飛びこんでゐたに相違ない。

治郷の註文と如泥の仕事との交渉から、おほくの機智に富んだ語りぐさが生じてゐる。

あるとき、治郷は如泥と一彫師とにそれぞれ鼠をつくることを命じて、その技をたたかはしめた。二匹の鼠がならべられたとき、これを審判するものは猫であつた。猫はただちに如泥の作に飛びついた。鼠はかつをぶしをもつてつくられてゐた。

あるとき、江戸城中に諸大名があつまつた席で、めいめい國自慢がはじまつた。治郷は如泥の名をあげて、その神技をほこつた。すると、薩摩侯がいふには、いかに名人でも瓢箪の中に紙は貼れまいと。治郷は歸邸

して、如泥にそのことをいつた。如泥は紙漉場に行き、紙の繊維をとかした液を瓢箪にそそいで、これを振り、その乾くのを待つた。それが乾いたとき、紙は瓢箪の中に貼られてゐた。

あるとき、治郷は如泥に菓子器をつくることを命じた。如泥は仕事にかかるやうすが見えない。督促すると、たちどころに杉箱を一つ作つてさし出した。四分板に五寸釘を打ちこんだものである。しかも、板は割れず、釘をはらんでほどよくふくらみ、釘のぶつちがへがうつくしい地文を成してゐた。

右の鼠も瓢箪も菓子器も、みな今日にはつたはつてゐない。ちなみに、瓢箪は治郷の好むところであつたやうで、如泥の細工にはをりをりその模様をあしらつたものを見かける。菓子器の五寸釘といふのは、もちろん今日の市販のものとはちがふ。鍛冶屋が手をもつてつくつた鐵の釘である。あるひは、如泥が手づから

それをつくつたともいはれてゐる。明治の中ごろに、如泥作の煙草盆の、二分板に徑二分の木釘を打ちこんだものを、見たひとがあるといふ。別に、如泥は一箇にして三ツ組の木盃をもつくつた。つまり、これを見れば一つだが、ひねれば三つになるといふ子持仕立てである。かういふ細工は、後世の職人もまたころみてる。

如泥は酒を好んで、をりをり居酒屋に行つた。居酒屋といつても、造り酒屋の、店の一部を土間にして、そこに客を入れたところのやうである。如泥はいつもふところに五枚の板を用意してゐて、即座にその板を組みたてて枱をつくり、酒をつぐに用ゐた。板がびつたり合つて、酒は一しづくも洩れなかつたといふ。

ちなみに、むかし松江の居酒屋では、ひとは酒をのむに焼物の碗を用ゐたさうである。わたしの如泥めぐりのために東道主人の役をつとめて下さつた母衣町の

太田柿葉翁から、その碗の今焼のうつしを贈られた。その状はなはだ薄茶の碗に似てはゐるが、もちおもりがして、やつぱり酒器である。これはなみなみとついで三合、ちよつとこぼれる。すなはち、二合五勺をつぐに適した碗である。コナカラのモリキリといふものの何たるかを、わたしはこれに依つて諒解した。かの如泥の組立枱は今にのこつてゐないので、それがどれほどの量を入れたものか、知るよしがない。

如泥はときに酒屋の勘定にさしつかへた。そして、そのをりには、小さい龜の彫物をもつて支拂に代へた。酒屋がしぶい顔をする、如泥はその龜を水にはなしてみろといつた。ころみにこれを水に投げれば、龜は自在におよいだ。酒屋は龜を賣ることに依つて、如泥の勘定よりおほく利を博したといふ。この龜はいかなる仕掛のものか、これまた今日に見ることができない。

如泥の家に一女がゐた。妻ともいひ娘ともいふ。女はかんざしを買ふ錢の無いことをなげいた。如泥は竹の枝にちとの細工をほどこして、かんざしをつくり、女にあたへた。女がこれを髪にさして巷を行けば、すこぶるふぜいがあつて、銀かんざしをさしたすべての婦女子をして顔色なからしめた。またこれを賣れば米鹽の資ともなつた。この竹かんざしのいくつかは、つい近年まで、松江の某家にのこつてゐたさうである。

盆くれには、如泥は家にあるほどの錢をカマスに入れて表口に出しておいた。そして、債鬼の來つてこれを取るにまかせた。カマスはからになつても、債鬼はあとを絶たない。如泥はいつた、來年こいと。世にこれを如泥拂ひといふ。

如泥がさる豪家をたづねたとき、たまたまその主人が書家をまねいて字を書かせようとしてゐた。非常に大きい幟に、天満宮の三字を書く。書家は幟の布の

上にあらかじめ木炭をもつて字の位置をさだめようとするが、布が大きすぎて字の恰好がつかない。書きあぐねてゐたところであつた。如泥は黒豆をたくさん用意させておいて、書家に代つて布にむかつた。布を庭にひろげて、その上に黒豆をならべ、三箇の大字をかたどらうとする。そして、書家をかたはらの木にのぼらせて、上から見て、黒豆のかたちの正しからざるところを直すやうに聲をかけさせる。聲に應じて字形をととのへ、その跡を木炭でしるして、つひに書を成さしめたといふ。

大原郡に梶谷東谷軒といふものがゐた。かねて如泥の風をしたつて、ある日大鯛一尾をたづさへてその家をたづねて來た。ときに如泥は留守であつた。東谷軒は庖丁を借りてくだんの鯛をサシミにつくり、これを置いて辭し去つた。入れちがへに、如泥がかへつて來て、かの鯛のサシミを見るに、その庖丁の切口あざや

かであつたので、すぐ東谷軒をよびもどして、ともに語つたといふ。東谷軒は如泥について一刀彫をまなび、ほぼ麻葉陰陽すかしの法を體するにちかきをえた。その遺作はなほ今日に見る。

如泥の軼事と稱せられるものは、さがせば他にもあるだらう。わたしはここに名人説話の分布圖をつくることを目的としてゐないので、すべて省略にしたがふ。ただ、つぎの一事はどうも誤傳のやうにおもふ。

松江に一代で巨富を積んだ某といふものがゐた。某が新邸をきづいたとき、如泥をまねいて檢分を乞うた。仔細に見まはるに造營は間然するところが無かつた。やがて、すすんで奥の間に入れば、ここはまた一段とみごとな作りであつた。如泥はいきなり斧をもとめた。そして、斧を手にすると、やにはにうつくしい床柱に一撃をくはへた。完璧なるがゆゑに、これを打つたのだといふ。すなはち、その意は某の驕慢をいましめる

にあつたのだといふ。バカなはなしである。いましめるためとはいつても、斧の一撃もまた驕慢の所爲ではないか。如泥みづから大工である。大工の斧は、道學先生の説教のやうに、うつくしい柱に疵をつけるためのものだらうか。するどいといふことはちがふ。如泥の作風を見るに、たくみに鋭鋒をつつむにまるみをもつてしてよい味を出してゐる。このはなしには、この如泥のまるみが出てゐない。もし斧をふるつたものが實際に如泥であつたとしたらば、わたしはかういふまるみの無い如泥を好まないだらう。しかし柱を打つたのは如泥ではなくて、おそらく「如泥大工」であつたにちがひない。

ところで、如泥の軼事はさまざまあるが、その中に當時の江戸の文人墨客がちらほらするやうなはなしは絶えて聞かない。江戸から遠路はるばる松江にまであそんだものはきはめてまれであつたにしても、如泥の

はうは治郷にしたがつていくたびか江戸にのぼつてゐる。そして、治郷は江戸でも風雅のきこえをとつた大名である。もし如泥が江戸の文人墨客といささかのつながりをもつたとしたらば、その名はつとに東武につたはつてゐたはずだらう。しかるに、そのことを聞かないのは、如泥は江戸にあつてもおほむね藩邸内にこもつて、附合を外にもとめようとはしなかつたものとおもふほかない。身分のせりもあり、性癖のせりもあつたのだらうか。また如泥がよく文事を解したやうには見えない。したがつて、如泥と江戸の文人墨客との交渉は、それがあつたと考へるよりも、無かつたと考へたはうが妥當である。

さて、これらの如泥咄には、わたしは薄茶とともにたんのうした。打ちどめに、如泥没後の軼事としてつたへられるものを一つ、柿葉翁の著述に據つてしるしておく。

如泥は死期の近きことをさとつて、大箱一箇を治郷に獻じた。これを松江から江戸にはこぶために、長尾右京といふもの宰領としてのぼつたが、小田原の本陣に至つたとき、箱根越の山祝の酒に酔ひ、禁をやぶつて箱をひらけば、三本マストの黒船一艘そこにあらはれた。船首の臺上に身のたけ三寸ほどの紅毛船員が望遠鏡をもつて立つてゐたが、船尾のねちをひねるとひとしく、これがさつと船室に引つこむ。と見るまに、いでたちとりどりの異人のむれが一度におこつて、めいめい部署につき、船長の命令一下、砲はたちまち石火矢を發した。先年夷艦北海をさわがして以來、松江城下でも舟手の調練おこたりなかつたが、これは外夷來寇の狀をうつした細工と見えた。ときに、出雲藩のしるしをつけた大釣瓶彈一發、宙を飛び來つて船長室に落下し、船はくだけ、もろもろのかたちは裂け散つた。右京は罪を一身に負つて自決したといふ。名工如